

若手アカデミー会議（第24期・第11回）議事要旨

令和2年9月19日 13:00～16:00

オンライン（Zoom）開催

出席者（順不同）：

岸村、新福、高瀬、岩崎、前川、川口、木村草太、中西、中澤、笠井、岩永、西嶋、田井、小森、田中、加藤、高槻、埴淵、春日、遠藤良輔、大矢根、土屋、竹村、隠岐、川崎、寺田、森、住井、平田、小野、新宅、實藤、高山弘太郎、遠野、安田、谷口、武田、松中、所

【議題】

（一）幹事団からの報告等

・若手アカデミー任期に関する規定の改正について

日本学術会議の期中で若手アカデミーの任期が終了しないよう、若手アカデミー任期に関する規定の改正が行われたことが岸村代表から報告された。また次期への申し送り事項として、特任連携会員の枠の拡大について検討がなされた。

・シチズンサイエンス公開シンポの報告

2020年7月25日に公開シンポジウム「シチズンサイエンス・当事者研究が拓く次世代の科学：新しい世界線の開拓」がオンラインで開催され、活発な議論がなされたことが高瀬幹事から報告された。

・原田弘二基金について

原田弘二基金について岸村代表から紹介があり、長期的視点にたって活用していく必要があることが述べられた。

・2022年Global Young Academy総会開催について

Global Young Academy総会が日本で開催予定であり、新型コロナウイルス感染症のために2022年の予定となったことが新福副代表から報告され、協力や参加に関する依頼がなされた。また、同総会について日本学術会議の共同主催国際会議へと応募することについて議論が行われた。さらに、開催場所として九州大学を予定していることが岸村代表から報告された。

・シチズンサイエンスの提言発出について

若手アカデミーとして提言「シチズンサイエンスを推進する社会システムの構築を目指して」を2020年9月14日に発出したことが報告された。

・学術の動向執筆状況と依頼

『学術の動向』誌で行われている連載「学術と社会の未来を考える」の紹介と協力依頼が岸村代表からなされた。

・地方学術会議について

地方学術会議について、今後各地域への展開が行われる予定であることが岸村代表より報告され、若手アカデミーの活動と関連づけていくことについて検討が行われた。

- ・文科省科学技術・学術審議会学術分科会

同分科会から「コロナ新時代に向けた今後の学術研究及び情報科学技術の振興方策について（仮）」と題した提言を9月中に発出予定であることが岸村代表・新福副代表から報告された。特筆すべき点として、若手アカデミーの意見が多数反映されていることが紹介された。

- ・URA大会での若手アカデミー紹介

西嶋会員より、リサーチ・アドミニストレーター協議会にて若手アカデミーに関するプレゼンテーションを行ったことが報告された。

（二）科学者委員会同分科会等での取り組みについて

- ・科学者委員会＋軍事的安全保障研究声明に関するフォローアップ分科会

同委員会・分科会における議論が岸村代表より報告された。また、天文学会におけるアンケートにおける世代間の受け止め方の違いや、研究所と大学における対応の違いなどの重要な論点について川口会員から紹介があった。

- ・男女共同参画分科会（アンケート検討小分科会）

同分科会における議論が新福副代表から報告され、特に、数値目標についての議論に関する紹介があった。また、同分科会アンケートの結果が新福副代表および川口会員から多角的に報告され、谷口会員から議論の詳細な内容が紹介された。

- ・学術体制分科会

同分科会の活動が岩崎幹事から報告された。関連して、2020年7月1日に総合科学技術・イノベーション会議第6回基本計画専門調査会で岸村代表・岩崎幹事が発言を行ったことが紹介された。

- ・研究計画・研究資金分科会

同分科会の活動、特にマスタープラン2020に関連する内容について、大矢根会員から報告があった。引き続き、若手アカデミーとしてどのように同分科会と連携するかという観点から議論が行われた。

- ・学術と教育分科会

同分科会の活動について西嶋会員から報告があった。特に、大学・学問の多様性といった観点からの議論内容の紹介があった。

- ・研究評価分科会

研究評価分科会について、提言をまとめている段階であることが松中会員から報告された。特に、インパクトファクター等の指標についての利用に関する注意点、若手に対する評価に関する留意点等が盛り込まれる予定であることが述べられた。

- ・科学と社会企画分科会

高山会員および高瀬幹事から、科学と社会企画分科会が開催され、若手アカデミーから多くの貢献があったことが報告された。

- ・「未来からの問い」について

10年ごとに学会会議でまとめている学術の未来に関する提言（前提言「日本の展望—学術からの提言2010」）について、今年は提言ではなく一般向けの書籍形式で出版を予定されており、執筆を行ったことが新福副代表より報告された。

（三）各分科会からの報告

- ・若手による学術の未来検討分科会

同分科会の議論について、川口会員から幅広く報告があった。特に、同分科会が扱うトピックを次期では分割して分科会として取り上げることについて議論が行われた。土屋会員から、教養教育の価値をきちんと位置付けることの重要性について意見が述べられた。岸村代表より、オンライン講義化が進む中、大学の教育がデジタルコンテンツ化できるものばかりとの誤解を社会に与えてしまう懸念についての議論が今後必要であることが述べられた。また、タイムマネジメントの重要性について川口会員から議論が提起された。

- ・若手科学者ネットワーク分科会

同分科会の活動について、開催予定であった若手科学者サミットが中止となったことが岩崎幹事から報告された。また、同ネットワークをうまく活用していくことの重要性が次期への伝達事項として提示された。

- ・イノベーションに向けた社会連携分科会

同分科会の活動について、高山会員から全体像の報告があった。また遠藤会員より、発出予定だった提言を25期への申し送り事項とすることが報告された。さらに小野会員より、地域社会と科学に関するワークショップを2021年3月に開催予定であることが報告された。25期に向けて、本活動を受けつぐ分科会が必要であることが確認された。その後、上記提言を発出する対象についての議論が行われた。

- ・国際分科会

同分科会の活動について、新福副代表から国際代表派遣、公開ワークショップ、学術の動向誌への寄稿を含めて幅広く活動報告がなされた。また、国際化に関する議論の内容が共有された。同分科会についても、活動を引き継ぐ分科会が必要であることが確認された。

- ・GYA総会国内組織分科会

同分科会の活動、および開催予定のGYA総会における企画案について、新福副代表から報告があった。

- ・分科会のあり方などに関する意見交換

目的を明確にした小規模の分科会を、メンバーの変更を含めて柔軟に設立・変更できることが活動の活性化に必要であるという意見、および、そのための枠組みの整備がなされることが望ましいという意見が岩崎幹事から出され、活発に議論が行われた。

(四) その他 (今後の活動に関する全体討論など)

GYA総会、イノベーション、若手研究者のスキル養成、ネットワーク、地域活性化、人材育成、業界改善といったキーワードに基づき、議論が行われた。さらに、学際研究、コアファシリティ、科学とアート、博士課程教育、外国人の受け入れといったトピックについての検討が行われた。

・ 25期新メンバーへの案内 (勧誘) について

今期の具体的な活動成果の紹介に加え、若手で分野を超えてネットワーキングすることの利点を伝達することが提案され、了承された。

また、新メンバー候補が60名を越えたときの対応について、世話人 (24期幹事団) が年齢、地域、分野のバランスを見て選考することが提案され、了承された。

最後にオンライン上での記念撮影を行い、本会議は閉会となった。